

「鑑賞ガイド」という風景のデザイン

慶應義塾大学環境情報学部教授

石川初
いしかわ はじめ



私の専門はランドスケープのデザインである。現在は教員として大学に勤めているのだが、以前は建設会社でランドスケープの設計を担当していた。

ランドスケープは「景観」や「風景」と訳される。しかし、景観や風景を直接作ることにはできない。景観や風景とは、環境と人との関係のあり方のことだ。ややこしい言い方で恐縮だが、ランドスケープをデザインするとは「構造物や植物を使って空間を構成することで良き景観や風景が生まれる環境を仕掛ける」ことである。

だから、建設するだけがランドスケープのデザインではない。すでにある空間や物事の新しい見方や解釈を提示したり名前をつけたりすることで、人の眺め方や感じ方が変わることがあれば、それはランドスケープのデザインなのである。

これは昔から考えていたことだが、より強く思う

呼んでいることが到達目標である。

テーマは自由である。ある学生は「電線」を選んだ。軽い気持ちで決めてもいいが、それから3カ月あまりひたすら電線を眺め、見いだした魅力や新しい美をどのように表現し共有するか、考え続けることになる。その学生は悩んだ挙げ句に「電線は直線で構成された都市風景に重ねられた手描きの補助線である」と言い始め、風景に電線を重ねてみることでできるアクリル板を制作した。

またある学生は「バス停」を選んだ。バス停のような記号性の強い物を鑑賞するには、それがバスが止まるための目印であるという常識をいったん払拭する必要がある。簡単ではない。

その学生も悩んだ末に、「バス

ようになったのは、大学に着任してからのことだ。

研究室には多様な学生がやってくる。ランドスケープのプロを養成すべく一様に鍛えるよりも、ランドスケープ的に考え、見聞きし、批評できる「ランドスケープ思考」を持った多様な人材を育てた方が、社会のためになるのではないかと思うようになってきたのだ。

そんな教育の一環として行っている「鑑賞ガイド」制作を紹介したい。研究室に新しく参加する学生に「日常の場面にありふれているが、通常は鑑賞する対象とは考えられていないものを愛するためのガイドを制作してください」と出題し、1学期間かけて講評を繰り返す個人課題である。提出作品の形式は、手に持って散歩できる大きさの冊子とし、それを見た人がそれまでとは全く違う目で対象物を見てしまうようになる(私たちは「呪いがかかる」と

停は受け入れられる空間である」などと言いはじめ、バス停のサインを自作して、大学や自宅の周辺のあちこちに置いてみるフィールドワークを繰り返し、最後には道端に「バス停がありそうな場所」を見いだしたり、バス停らしい名前を考案する方法を編み出したりした。

ほかにも「配管」を観察した挙げ句にお菓子やパスタに「配管性」を発見した学生、「錆」を細かく分類した学生、「自動ドア」「階段」「手すり」といった物体や「隙間」「跡」「色あせ」「透け」などの現象を鑑賞した学生もいた。このような制作を通じて、先入観を払拭することや愚直に物を観察すること、

と、見立てや想像を広げることなど、新しい風景を見いだし物語る「ランドスケープデザイン」のトレーニングを積むのである。

この方法は、凝り固まった視野を解きほぐして新しい風景を発見するために有効なので多くの人に薦めたいのだが、これまでの経験から、常識的・良識的な大人ほどガイド作りを楽しめないことがわかっていて、

試しに、一日中電線を眺めてみてほしい。その日の終わりにまだ電線が単なる電線にしか見えなければ、それは3カ月間電線と向き合った方がいいというサインかもしれない。



バス停を作る



受け入れてくれそうなスペース、すなわちバス停予備軍はかなり多い。しかし、日常に溶け込み、埋もれている場合が多い。バス看板を持ち歩き、立てることで、場所の受け入れてくれる感を引き出すことができた。

略歴

慶應義塾大学環境情報学部教授。博士(学術)。1964年京都府宇治市生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。鹿島建設建築設計本部、株式会社ランドスケープデザイン設計部を経て2015年より現職。著書に「思考としてのランドスケープ 地上学への誘い——歩くこと、見つけること、育てること」(LIXIL出版、2018年、日本造園学会賞受賞)など。
<https://hajimehb.tumblr.com/>

時の調べ
Essay